

会員証の写真のゆがんだ微笑みを今日より長く持ち歩くなり

浮かべればいいだろう。あまり気に入らない自分の顔を、仕方がないから、しばらく社会向けの顔として容認している、というのだ。自身の思いと矛盾する現実との妥協。むつかしいところを作品化した。

万緑の右ゆ左ゆ闘ぎ合ふ間車軸を傾げ抜けゆく  
繁った木々のボリューム感、走り抜けて行くスピード感がさりげなく感得できて気持ちがいいバイクの歌。ただ「車軸」は「車体」でいい。スピード感が削がれてしまうようだ。

よく晴れた二月の朝の海浜に駅伝の脚しなやかに並ぶ  
駅伝のスタート地点らしい。「駅伝の脚」という省略の表現が、ここではよく利いている。何百本もの脚が冬日に光つているのが見える。

朝に筍、夕に蕨をいただきて五月の厨に大鍋ならぶ  
筍と蕨を茹でる大鍋。昔はこういう時のために、どの家にも巨大な鍋があった。一首が、読者を懐かしい気分に誘うのは、こういう大鍋のある家が少なくなつてしまつたからだろう。

嘶家の二の腕の皮膚みつめおり生温かい不思議な時  
間  
大谷ゆかり

細溝洋子  
佐藤博之

寄席で前の方に座つて、落語家を近くで見上げる感じだろうと読んだ。最近はブームらしく、嘶家をうたつた歌も多いが、寄席の歌としてフレームの取り方が独特である。

九センチの足で蹴られて起きる朝目覚まし時計の鳴る五分前  
吉本万登賀

幼児に起こされるお母さんの歌。「九センチ」「五分前」という数詞を使つて特色を出している。

一生を墨を持たずに過ぎゆける我は輝く遊撃手  
浅野稔

下句の決まり具合、リズムがいい。着地がいいので歌の姿がいい。意味的には、一墨手や二墨手と違って、特定のベースを持たない遊撃手が、人生の比喩になつてゐるのだろうと読んだ。たとえば、組織や企業に所属しない生き方など。

友だちは少なくて良しと言う君は少ししかおらぬ我の友だち  
小畠千佳

最近、人間関係に取材した短歌が、一時期に比べてずいぶん減つてきたようと思う。組織内の人間関係、社会的な人間関係、経済的な人間関係等、かなり突っ込んだ関係をうたつた歌が多かつた時代は終わつたのだろうか。そんなことを思つてゐる昨今、面白い人間関係の歌にであつた。

ゼンマイとオニゼンマイを教えられ白き産毛の渦巻  
きを摘む  
鈴木香代子  
山菜摘みを楽しんでいる作。下句の工夫された表現が

## 短歌の現在

No.437 今月の15首を読む

佐佐木幸綱